琉球大学学術リポジトリ

Relative dose intensity and overall treatment time in older patients with cervical cancer treated with concurrent chemoradiotherapy

メタデータ	言語:
	出版者: University of the Ryukyus
	公開日: 2021-04-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Nakamura, Rie, 仲村, 理恵
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48283

令和　2年　12月　21日

（別紙様式第７号）

論　文　審　査　結　果　の　要　旨

報告番号	課程博 ＊　　第　　号 論文博	氏名	仲村　理恵
論文審査委員	審査日　令和 2 年 12 月 17 日		
	主査教授　益崎裕章　印		
	副査教授　鉢不玲子　印		
	副査教授　中村克徳　印		

（論文題目）

Relative dose intensity and overall treatment time in older patients with cervical cancer treated with concurrent chemoradiotherapy（65歳以上の高齢子宮頸癌患者における同時化学放射線療法の用量強度および総治療期間に関する検討）

（論文審査結果の要旨）

１．研究の背景と目的

本邦の 65 歳以上の高齢者は増加傾向である。局所進行子宮頸癌には同時化学放射線療法（CCRT）が標準治療である。CCRT は抗がん剤と放射線治療を同時併用し、両者の増感効果を期待する治療法である。高齢者は臓器機能障害を有する患者が多く、がん治療に対する有害反応が生じやすいとされ、軽度とされる有害反応でも身体機能低下に結びつきやすい。さらに高齢子宮頸癌患者は、より進行した状態で診断され、積極的な治療を選択できないことも多い。以上より高齢者は臨床試験の対象から除外されることが多く、高齢者における局所進行子宮頸癌に対する CCRT 治療の有効性や安全性についての報告が少ないのが現状である。そこで、本研究では高齢者子宮頸癌患者に対して、十分な CCRT が実施できているかを検証した。

２．研究内容

2009 年から 2019 年に、当院産婦人科で CCRT を施行した子宮頸癌患者（65 歳以上の高齢者群 30 例、64 歳以下の非高齢者群 131 例）を対象とし、放射線治療完遂率、相対用量強度 relative dose intensity（RDI）、総治療期間 overall treatment time（OTT）、有害事象、無増悪生存期間 progression free survival（PFS）、全生存期間 overall survival（OS）について後方視的に調査した。RDI は計画用量強度に対する実用量強度の割合と定義され、化学療法の治療強度の指標となる。OTT は放射線治療の総治療期間で治療成績に影響する重要因子とされ、子宮頸癌の CCRT では 8 週間以内に収めるように推奨されている。化学療法コース数と RDI は高齢者群で非高齢者群に対して有意に低値であった（p=0.043, p=0.023）。一方 OTT と治療完遂率の間に有意差は認めなかった。予後について PFS と OS に有意差は認めなかった。有害事象についての検討では、高齢者群において急性期の悪心嘔吐、晩期の骨折が有意に増加していた（p=0.023, p=0.009）。従来より子宮頸癌に対する放射線治療後の骨盤不全骨折のリスク因子として、閉経後、関節リウマチ既往、高線量率腔内照射、骨粗鬆症が挙げられる。今回、高齢者群で RDI の低下を認めたが、主治療である放射線治療の OTT と治療完遂率には有意差がなく、基準値内で放射線治療が完遂できれば、予後に影響しない可能性が示唆された。有害事象については、高齢者は、骨盤不全骨折による ADL 低下をもたらす可能性があり、晩期有害事象については、長期間注意が必要である。

３．研究成果の意義と学術的水準

高齢者における局所進行子宮頸癌に対する CCRT の有効性や安全性についての報告は少なく、積極的な治療を選択できない患者もいる。局所進行子宮頸癌に罹患した高齢者にとって、予後に影響することなく CCRT を選択できる可能性を提示できた本研究結果は臨床的に重要であると考えられる。以上より、本論文が琉球大学大学院医学研究科の博士論文としての要件を十分に満たしており、学位授与に値するものと判断した。

備　考　１　用紙の規格は、Ａ４とし縦にして左横書きとすること。
　　２　要旨は800字～1200字以内にまとめること。
　　３　＊印は記入しないこと。

令和　2年　12月　21日

（別紙様式第８号）

最終試験結果の要旨

報告番号	＊課程博第　　号	氏名	仲村　理恵

論文審査委員		
	審査日	令和　2年　12月　17日
	主査教授	益崎裕章　印
	副査教授	鈴木幸男　印
	副査教授	中村克徳　印

（最終試験結果の要旨）

1．提出論文の内容、意義について十分に把握していること。
2．研究の背景、目的と方法について熟知していること。
3．研究の結果について正しく理解していること。
4．関連する国内外の研究を良く把握していること。
5．研究成果の展望について確かな見識を有していること。

審査の結果、これらに関連する質問に対して十分満足する回答が得られたため、本学大学院博士課程を修了するに値すると判断し、最終試験は合格とした。

備　考　1　用紙の規格は、Ａ４とし縦にして左横書とすること。
　　2　＊印は記入しないこと。